

る。整備された自然がいいと言うのも、河川敷公園の問題として言えば、一方で、自動車も走らないので交通事故はない、それに非常に危険もないし、野外活動のできる場としては、少なくとも街の中よりはいいという立場で、肯定される方もかなりあると思います。しかし、実は河川と河川の役割という問題で、そこを公園にしてしまうというのは、一つの土地に対して際限のない役割を押しつけるその中の一つとしてあの河川敷公園を考えているということで、それに非常に疑問を持つんです。

日浦 時間が参りました。一番年少の方に見えます熱心にメモを取っておられる高校生の方、最後にしめくくりの発言をお願いします。

竹中 僕は今まで自然保護についてほとんど何も考えていなかったで、これを機会に考えようと思って来ました。自然保護を考える場合、まず自然とは何かということが一番問題になってくると思います。草木があれば自然かという必ずしもそうではない。けれども、森の中では一本の木もやはり自然でしょう。ただの一本の木なら自然にならない。では一体自然とは何か、ということで、非常に考えさせられた。また、それを保護するのも、学問的な意味での保護と人間の環境としての自然を保護する問題と、それをどうしていくかという問題は解決できなかったとは思いますが、これからのヒントになると思います。それから治水のことですけれども、今までは、水を完全に抑えるべきだという考え方でコンクリートで防げ、という考えが出ていましたが、逆に、流れるのであれば流れさせて、洪水にさせてしまって、それから人間をどう守るか、というように受身で考えても良いと思います。人間が自然を抑えるというふうに考えないで、自然に一步譲って、その上で治水をしよう、また自然を保護しようというふうに考えたらいいと思います。

おわりに

森下正明（京大・理・動物）

近畿地方建設局の淀川改修ならびに河川敷公園計画に対して、このシンポジウムで問題とされた点は、大別して次の2点に帰着すると思われる。第1は、淀川の治水と河川敷の自然保護とは両立できないかという点であり、第2は、わざわざ人工的な河川敷公園をつくるよりは、現在の自然のままの河川敷の方が、はるかに流域の一般住民にとってのリクリエーションの場としてふさわしく利用価値も高いのではないかという点である。

第1の問題の中の焦点である現在の淀川河川敷の自然

のもつ貴重な価値は、このシンポジウムにおいても多くの話題提供者によって強調された。近畿地建の改修案では、この貴重な自然が根本的に破壊されることが明らかである。これに対しての地建の考え方は、流域住民の生命財産を守るためには治水工事は最優先に考えるべきであって、そのためには自然が犠牲にされても止むを得ないという点につきます。この考え方それ自体は何人も否定できない所であり、特に人命に関する問題はどのような場合にも最優先に考えなければならないのは当然である。問題となるのは治水の可否ではなく、現在の改修案が果して治水のための唯一の方法であるかどうかという点であろう。これについてはすでに自然保護と治水とをある程度まで両立させる代案が、「淀川の自然を守る会」から提案されており、今回のシンポジウムにおいてもこの立場からの提案は行われているのである。ただし地建の計画案の説明にあられた縄田氏が早く退場されたため、この両立案に対する地建側の考え方を聞くことができず、したがってこれに対する討論も行われないうままに終わったのは残念であった。もっとも地建側の説明においても治水上支障のない位置でのワンドの人工造成や、水から陸への連続性を残した護岸構造の採用などについて考慮したいという発言はあったが、これはあくまで現在の計画の基本を固定した上での、いわば弥縫的な自然対策ともいうべきものであろう。最初から治水と自然保護を両立させようとする努力の積み重ねがあったならば、計画の基本自体がもう少し違った形になり得たのではないかと思われる。この立場からの計画の練り直しは今からでも地建に是非お願いしたい所である。そしてこれは自然に親しみをもつすべての国民の要望でもあろう。もちろんこのような練り直しに対しては生態学者も協力を惜しまないものと考えらる。

第2の河川敷公園計画は、第1とは全然次元の異った問題であって、地建の公園計画の理念が真に「自然と人との出会い」を求めるといふのにあるならば、せつかく与えられている自然環境をつぶして、非自然的な人工公園にかえようという計画は、矛盾もはなはだしいといわなければならない。今回のシンポジウムで指摘されたように、現在河川敷は「自然と人間との対話の場」として充分利用されており、また河川敷が現在のままであってこそ、自然と人間との対話の場として生かせるのである。地建の公園に対する理念が単なるうたい文句ではないとするならば、現在の河川敷の自然保護の道をとることこそ、その理念を貫くための最良の方法といえるであろう。さきに述べた練り直し案に必要なものは、まさにこの理念の具現である。